

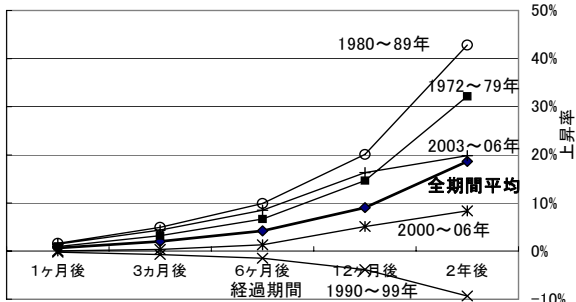
NO.6 長期投資か チャンスに賭けるか

経済調査部長 有働 洋

株価変動のばらつき

以前、株式投資した後、短期間では元本割れが生じやすいが(90年代を除くと)投資期間を経るにつれ元本割れが徐々に解消される傾向にあったことを見た。今回は1972年以降の株価データを使って、投資後の時間の経過と株価上昇率の平均値を各年代別に資料1に示した。1ヶ月から2年まで、投資期間が長くなるほど株価(TOPIX)は総じて上昇していく様子がみられる。全期間の2年後の値上がり率を平均すると18.6%だった。投資家に長期投資を勧める場合の根拠がこの平均値としての上昇傾向だ。

資料1 投資から1ヶ月~2年後の上昇率(年代は判明時)



(出所) 東京証券取引所、TOPIXをもとに第一生命経済研究所算出

一方、平均値は上昇していても、通算で2年後に元本割れだった場合が全体の3割あり、株式投資の結果にはばらつきが大きいのも事実だ(4月号参照)。また、1990年代は例外的に投資期間を長くするほど株価は下落する傾向にあり、際立って投資効率の悪い時期だった。

長期投資のタイミング

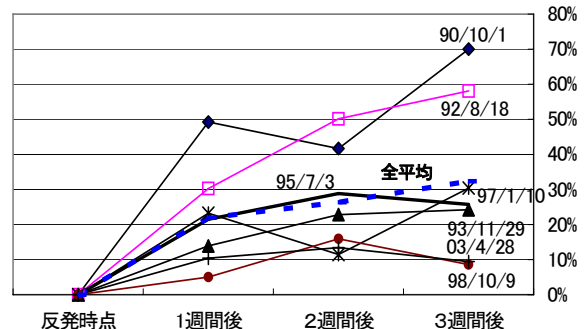
「長期投資」は投資の基本というが、上記の2年間程度の投資では、いつでも安定した収益が得られるわけではない。2年を長期投資の入り口とすると、その間の元本割れに痺れを切らせて損失を確定する投資家も出てこよう。経済環境や企業業績に比べて株価が過熱しているタイミングや、デフレ期のように株式投資に向かない時期に一気に投資すれば、長期間投資を続

けること自体が難しくなる。その点、例えば年単位のゆっくりしたペース配分で残高を積み上げていくことは長期投資の一つの方法であろう。

株価急上昇のチャンスを狙う?

株価が上がる直前や反発を見極めたらすぐに買うというのはどうだろうか。短期で売り抜けさえすれば相場トレンドにも左右されず値上がり益が手に入る。1990年以降の日経平均株価の軟調な時期でさえ、ざっと7回の大きな反発局面があった。高値までの指数の平均値上がり率は44.8%で、平均44週余りかけてピークに達した。資料2は反発後の最初の3週間で、その後の高値の何%まで到達したかを示している。

資料2 底値後の3週間までの高値達成率



(出所) 日本経済新聞社、日経平均株価をもとに第一生命経済研究所算出

3週間後の到達位置の平均は高値までの上昇幅の32%。70%に達した例もあった。このように株価は反転直後に急騰することが多い。だが底入れを予知して直前に資金を投入するのは神業だ。一方、大反発か否か3週間見極めてからだ、高値までの株価上昇スピードはぐっと落ちる。投資後に何度か株価が調整する可能性は高い。急反発前後は値上がりだけを狙ってタイミングをとるにはむしろ難しい局面でもある。
- A watched pot never boils. - (じっと見据えていると薬缶はなかなか煮立たない: 諺)

うどう ひろし (経済調査部長)